2017年4月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第483号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「クルマ社会」に対する問題提起 そして女性・高齢者問題を フィールドに出版活動を続けてきた。

文・五十嵐美那子（生活思想社代表）

「脱クルマ２１　№１　クルマに頼らない生活づくり」（脱クルマ・フォーラム編集／税込価格2,376円）

「女たちが動く　東日本大震災と男女共同参画視点の支援」（みやぎの女性支援を記録する会　編著／税込価格2,160円）

20世紀の終わりに出した『脱クルマ21』

活動実践の本を出し始めて20年になる。地方・小出版流通センターさんに取次をお願いして、もうそんなに時間がたったのかと感慨深い。

弊社第一冊は『脱クルマ21』という、年1回刊行の「クルマ社会を考える」本だった。1996年の刊行で、ちょうど21世紀を迎える前だったので、クルマの問題が少しでも次の世紀には解決できるように、と「21」という数字を入れた。

内容は、クルマ社会の弊害――交通事故、違法駐車、騒音、排ガス、子どもの遊び場であった路地への侵入など――を扱っていこう、というもの。それぞれの分野で活動している市民が編集委員となって毎月1回編集会議を午後1時から5時までやっていた。編集者の本音としては、毎月この1回の編集会議で月の労力の半分は使い果たしているのではないか、というほど、皆さん熱心で、意見が割れたり、調整が困難だったりすることも多々あった。メールを使いはじめたのもこの頃だった。

びっくりしたことは、この本が取次（地方・小さんですね）に入る前に、池内了先生（宇宙物理学者）が、毎日新聞の書評に紹介してくださったことである。もちろん、「クルマ社会を考える本がついに出た！」という勢いで。事前に『毎日新聞』の担当者から電話があり、「本当にこの本出ているんですか？」と聞かれた。たぶん書誌データもまだ出ていなかったからだろう。「まだ市販されていませんが、出ます」と答えた。紙面は書影も文章も予想外に大きく、読者からの反応も大きかった。まだまだそういう雰囲気が残っていたのが20世紀の最後の頃だった。

残念ながらこの年刊誌はまさに「3号雑誌」となり、終わった。が、この3年間で取り上げたことは、技術力、市民の地道な活動などが追い風となり、解決とまではいかないが、問題が小さくなってきたことも多かった。そんななかでも、飲酒運転、交通弱者などまだまだクルマ・交通問題は解決していないことが多い。本書3冊はクルマの問題を考えるきっかけとなるだろう。やらないと、社会は変わらないんだから…。

実践記録は「記録」だけでは終わらない

3号作り終え、それからは月1回の編集会議もなくなり、もともとのフィールドだった女性問題・高齢者問題に足場を移した。

小さな町の大きな女性たちの学びをまとめた『埼玉県よしかわ発　男女共同参画物語』は、まさに小波のように全国に拡がった。女性たちは「自分が理不尽だと感じていたことが、ジェンダーの問題だったんだ」と「わかった」。その理解を基盤にした、地域活動を一冊にしたこの本は、各地でやはり地道に学び、活動している女性たちの心に届いたのである。

ある人は、「この本で自分と同じ苦労をしていると思ったら涙が出た」とご自身のブログに書いてくださった。この本がきっかけで、「こういう、みんなで学び実践したことを記録としてまとめたい」というお話を何件かいた

だいた。

ある方は、この本の天地とページをめくる側にたくさんの細かい付箋を付けて読んで下さっていた。その方は、初対面の私を見たとたん「悔しい！うちだって、こういう本を出したかった、出せるだけの力があるのに」と言われた。その後、この方々の本『０歳からのジェンダー・フリー　山梨からの発信』は、ジェンダー、教育・保育の分野で評価されている。みんな、自分たちの実践を発信したいし、記録に残すことはとっても重要なことなのだ。そして発信したことで、たくさんの人達がまた自分たちの実践に取り込んでいく。それが実践書の醍醐味なのだ。

本作りから活動の真っ只中へ

東日本大震災では被災女性のために被災女性が支援した活動記録を出した。私の個人的なつながりから発生したこの支援、『女たちが動く――東日本大震災と男女共同参画視点の支援』として宮城のＮＰＯ法人理事や大学の先生、男女共同参画審議会委員、新聞記者、自治体職員といった、各分野で支援活動をした人達が執筆陣。2011年の震災後、４月から被災女性の支援をはじめた皆さんは、軽重の差はあれどそれぞれが被災者でもある。女性がいま、必要としている物を大事に汲み取っていき、物資を集めて避難所の女性たちに配っていった。そのさなかで、上記の本の執筆がなされた。

「いま、書かないと」「今、記録しておかないと」という昂ぶる気持ちから、困難な状況下で2011年秋から執筆がはじまり、翌年の４月に出版された。

被災地の女性の様子がわからないなか、この本は一般の方々、支援に取り組む方々に読み継がれている。「こんな時、何が必要なのか」「女性たちはどう思っているのか」。地震のない場所はない、と言われる日本各地で、行政職員も含め、あのときの困難と活動、実践の記録は確かにつながっている。

出版、実践記録とは、そういうものではないか、と20年たって思える。

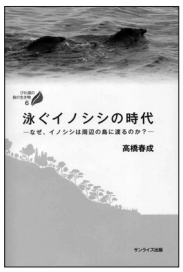
＊

（いがらし　みなこ／生活思想社代表）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率８%）表示です。

『泳ぐイノシシの時代　－なぜ、イノシシは周辺の島に渡るのか？』●高橋春成著



イノシシといえば山の動物というイメージがあるが、じつは海や湖、川を普通に泳いでいる。

日本列島の各地にいたイノシシは、明治・大正の時代になると山間地の開発で減少し、多くの島で絶えた。昭和の高度成長期に入ると過疎地や耕作放棄地の増大、猟師の減少、暖冬化、肉を得るためのイノシシ、イノブタの飼育等で、再びイノシシは増え始めた。その結果、1980年頃から列島各地でその泳ぐ姿をよく見かけるようになった。琵琶湖、若狭湾、紀伊半島、瀬戸内海、愛媛、福岡、佐賀、長崎、天草、奄美、沖縄の沿岸各地ではとくに多いという。この生育地の拡大は農作物の被害をもたらした。　では、なぜ何のためにイノシシは泳ぐのであろうか。著者の調査によれば、猟犬や山火事に追われて海に飛び込んで他の島に渡る例や、生育地が過密になり新たな場所を求めて海を渡る例、また瀬戸内や天草諸島など、なわばり内の移動で日常的に泳いでいる例も推測されるという。泳ぐイノシシに注目したユニークな本だ。

◆ 1944円・四六判・169頁・**サンライズ出版**・滋賀・2017/2刊・ISBN9784883256105

『もう一度　倫敦巴里』●和田　誠著

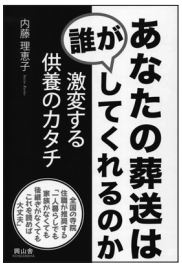
もしも世界の映画作家たちがイソップの寓話「兎と亀」をテーマに映画を作ったら……。川端康成の「雪国」の冒頭を他の作家や文化人風に表現したら……。

「暮しの手帖」ならぬ「殺しの手帖」で殺人の手ほどきを示し、毒入りのおそうざいのレシピまで紹介してくれる。こんな楽しい世界を展開してくれるのが和田誠。もちろん「雪国」ではそれぞれの似顔絵付きだし、ミュージカルや有名絵画や漫画をもじって描かれた人物も秀逸。ニャロメと野坂昭如の合成は見事としかいいようがない。

1997年初版の伝説的名著に新たに未収録作を加えて復刊された本書。パロディ本と言いたいところだが、本来パロディとは権威を引きずり下ろすくらいの力があるのではと考える著者は自分のやっていることは「モジリ」程度に過ぎない、でもそれが楽しいと語る。著者の観察眼と豊富な知識が光る戯作・贋作大全集。

◆ 2376円・Ａ５判・170頁・**ナナロク社**・東京・2017/1刊・ISBN9784904292716

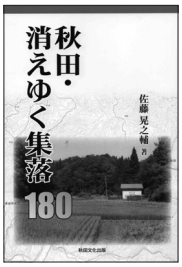
『あなたの葬送は誰がしてくれるのか　－激変する供養のカタチ』●内藤理恵子著



親が死んでも会社を休めない、弔いを親類や近所に知らせない、香典を受け取らない、無宗教葬儀が増え、家から仏壇が消えている。ネットで売り出される格安葬儀と僧侶派遣、祭壇の中心には位牌に代わって巨大遺影と過剰華美の飾り花。これが、近年の遺族と葬送の激変実態であるという。その要因の一つに上げられるのが、生涯未婚の者が増えていること。日本の葬送文化を専門とする研究者である著者も独身で、将来墓を持ったとしても継承する者がいない。巷の仏教書ですら法事不要論が語られ、墓参りも、それどころか墓すらも廃れる運命にあるのだろうか。家族と共同体の変容、供養の脱宗教化、利益追求の葬送ビジネスと競争の激化。こうした社会事象を追いながら、故人を心から悼むとはどういうことなのか、信仰とは何か、信仰の拠点としての寺院と僧侶の役割とはと掘り下げていく。著者自身の結論は、信頼できる菩提寺を持ち、その墓地に入りたい、であった。

◆3132円・四六判・377頁・**興山舎**・東京・2017/1刊・ISBN9784908027345

『秋田・消えゆく集落１８０』●佐藤晃之輔著

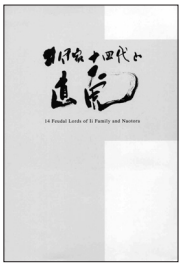


わが国は人口減時代に突入したが、消えゆく集落、すなわち「廃村」がどこにあって、どのような様子なのかは、あまり知られていない。また、秋田県の直近の国勢調査における５年間の人口減少率は－5.8％で全国一高く、今年中には人口100万人の大台を割ろうとしている。

本書は秋田県で農家に勤しむ著者が、県内180の農山村（戦後開拓を除く）の廃村について、その実態を克明に記録したもので、消えゆく集落編（主に平成８年以降に離村の32か所）、消えた集落編（戦後から平成７年以前に離村の115か所）、ダムに消えた集落編（33か所）の三部構成となっている。うち、平成10年代の廃村は14か所、平成20年代は12か所であり、近年も確実に生じていることがわかる。著者は20年前に『秋田・消えた村の記憶』を上梓しているが、「消えた村の取材の頃と比べると"そっとしておいてほしい"という声をよく聞くようになった」と記している。両著書を読み比べると、時代の変遷が実感できる。

◆1620円・四六判・238頁・**秋田文化出版**・秋田・2017/1刊・ISBN9784870225749

『井伊家十四代と直虎』●彦根商工会議所編



井伊家といえば桜田門外の変で斃れた大老直弼が浮かぶが、直虎はＮＨＫ大河ドラマで初めて知ったという人が多いに違いない。直虎は戦国時代遠江（静岡県）井伊谷の女領主で、初代彦根藩主直政のまたいとこと伝えられる。梓澤要の小説『女にこそあれ次郎法師』（後に『井伊直虎』）で脚光を浴びるが、謎めいた人物で、昨年末には井伊家史料を収蔵する井伊美術館が、別人の男であることをうかがわせる文書が確認されたと発表している。ともあれ彦根藩井伊家は譜代大名の筆頭として江戸時代を通して確固たる地位を築いた。その前史たる直虎時代から幕末に至る歩みを、戦国史（小和田哲男）、直虎と直政の人物像（梓澤要）、近世史（大石学）、郷土史（河合敦）、城郭（中井均）、造園（谷口徹）、民俗芸能（中島誠一）、藩史・領主列伝（彦根城博物館）の切り口で記す。地元商工会議所が地方創生と郷土愛の高揚にと企画したもので、専門的でありながら楽しい読み物になっている。

◆1944円・四六判・347頁・**サンライズ出版**・滋賀・2017/1刊・ISBN9784883256075

『忘れられた人類学者（ジャパノロジスト）　－エンブリー夫妻が見た〈日本の村〉』●田中一彦著

1935年熊本県球磨郡須恵村にアメリカから一組の夫婦が農村調査にやってきました。夫の名はジョン・エンブリー。後にルース・ベネディクト『菊と刀』でも参照された『須恵村』を著すことになります。妻の名はエラ・エンブリー。日本語に堪能で、夫の調査を助けただけでなく、村の女性たちとも親しく、後に『須恵村の女たち』という本も刊行しています。彼らは須恵村で一年にわたり調査を行いました。本書はエンブリー夫妻の残した著書を中心に、当時の農村の様子やエンブリー夫妻と村人の交友などを中心にまとめられています。近代化の進む中で変化しつつ維持されていた「協同」の精神、あけっぴろげに性にまつわる話をする村の女達など、自民族中心主義とは無縁で村の人たちに親しみを持って受け入れられていたエンブリー夫妻ならではの観察がさえています。そしてそこから垣間見ることの出来る100年前の日本は、現在の日本を相対化して考える点でも興味深いものです。

◆2160円・四六判・319頁・**忘羊社**・福岡・2017/3刊・ISBN9784907902162

売行良好書　期間：2017年2月15日～3月14日

［出荷センター扱い］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『牧野富太郎　通信』810円・トンボ出版　(2)『あひる』1404円・書肆侃侃房　(3)『シャクシャインの戦い』2700円・寿郎社　(4)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア　(5)『忘れられた人類学者（ジャパノロジスト）』2160円・忘羊社　(6)『未来ちゃん』2160円・ナナロク社　(7)『評伝　むのたけじ』1836円・無明舎出版　(8)『竹生島』1620円・サンライズ出版　(9)『一分間の強健法』3240円・壮神社　(10)『平成の湯治宿』1620円・九州人　(11)『関門の近代』237円・弦書房　(12)『ブックトークのきほん』648円・東京子ども図書館　(13)『ピアノの巨人　豊増昇』1836円・小澤昔ばなし研究所

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『昭和プロレスマガジン　４１』1000円・昭和プロレス研究室　(2)『本の雑誌　４０６号』720円・本の雑誌社　(3)『東京かわら版　３月号』500円・東京かわら版　(4)『パズル通信ニコリ　１５８』907円・ニコリ　(5)『近世城郭の考古学入門』3240円・高志書院　(6)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(7)『光の街、リスボンを歩く』1620円・書肆侃侃房　(8)『忘れられた人類学者（ジャパノロジスト）』2160円・忘羊社　(9)『電験３種超入門　理論篇』2160円・エコテクノ出版　(10)『佐竹一族の中世』3780円・高志書院

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(2)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(3)『北海道いい旅研究室１５』710円・海豹舎　(4)『シャクシャインの戦い』2700円・寿郎社　(5)『世界の終わり／始まり』2052円・書肆侃侃房　(6)『奥武蔵登山詳細図　武甲山・武川岳・伊豆ヶ岳・丸山　全１３０コース』950円・吉備人出版　(7)『山と河が僕の仕事場２』1728円・フライの雑誌社　(8)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1404円・書籍情報社　(9)『泳ぐイノシシの時代』1944円・サンライズ出版　(10)『三江線ＢＯＯＫ』1296円・ハーベスト出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

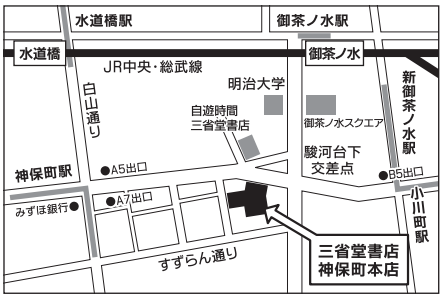
▼【本の雑誌】の名物企画「おじさん三人組が行く！」が単行本になりました。「出版業界社会科見学。新潮社、国書刊行会、武雄市図書館、文壇バー、etc. 気になるところへぶらりと訪問」（帯文より）。本書では弊社、地方・小出版流通センターのことも取り上げていただいております。**【本の雑誌　おじさん三人組が行く！】**著者：本の雑誌編集部／Ａ５判並製／３３６ページ／1800円税別／ISBN978-4-86011-298-1

▼**【出版ニュース３月中旬号】**で、弊社40周年に言及していただきました。また実践女子大学図書館／慶應義塾大学大学院の伊藤民雄氏による「数字で見る地方・小出版流通センターと公立図書館」という論文も掲載されています。東京の公立図書館における地方出版社、小出版社刊行図書の購入状況を調査したものです。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。